紀伊民報

2011年(平成23年)7月6日 水曜日 第20633号 (10)

日本一のクラゲ天国 田辺湾

24

カツオノエボシ

久保田 信

浮袋を持つカツオノエボシ（白浜町臨海で）

〝電気クラゲ〟の異名を持ち恐れられるのが、カツオノエボシである。刺されると感電したような痛みが体中を走るのでこの異名が付けられた。時には呼吸困難に陥ることもあるから要注意である。

この種の特徴である浮袋はコバルトブルー一色で、海の青色にうまく溶け込んで姿が分かりづらい。さらに人を刺す毒針の詰まった触手は30㍍ほども伸びる。このため、刺されたとしてもその周囲で浮袋を見つけるのは難しい。

このクラゲの本体は浮袋の真下に垂れ下がっている。ここに餌を捕らえて食べる部分や次世代をつくる生殖部が、林立するように存在している。

浮袋は長さ13㌢にもなる。海面にプカプカ浮かんで、風まかせ波まかせ。黒潮に乗って太平洋をぐるぐる回っていて、紀南地方沿岸では晩夏から秋にかけてよく見られる。昔から「お盆を過ぎたらクラゲに気を付けろ」と戒められたものだ。

浮袋内にあるガスの成分は、驚くことに生物にとって有害な窒素と一酸化炭素である。浮袋には左右いずれかに膨らむ肥厚部がある。北太平洋では右に膨らんだタイプが多く、亜熱帯では左タイプが多いとされる。

写真は、今年初めて京都大学瀬戸臨海実験所の北浜に漂着した個体である。カツオノエボシの飼育は難しく、水族館でもなかなか飼えない。水流と酸素が必要なようである。小さな時代はプランクトンとして海中を漂っているらしいが、どれくらいで浮袋を持ってどのように成長するかは未知である。

存在は皆によく知られているが、生態についてはほとんど分かっていない謎多きクラゲである。（京都大学准教授）